

P. H. Lindsay and D. A. Norman : Human Information Processing : An Introduction to Psychology

2nd Edition, New York, Academic Press (1977)

(邦訳) 中溝, 箱田, 近藤 訳: 情報処理心理学入門 I~III 巻

サイエンス社 (1983)

本書は、心理学がその将来像を“認知科学”という学際科学の中の1つのディシプリンとして大きく舵を切ろうとしていた1970年代の名著である。「人間の情報処理: 心理学入門」という当時としては非常に思い切ったこのタイトルは、心理学の目標が脳の機能として心の情報処理プロセスとそのメカニズムの解明であることをはっきりと宣言している。その意味で、本書は19世紀以来、ヨーロッパと北米で連綿と続いてきた心理学諸学流の雑然とした流れ—— 当時は行動主義心理学もゲシュタルト心理学もまだ命脈を保っていた—— を、一気に認知心理学へ向けてテイクオフさせた、いわば心理学テキストのブレークスルーとなったのである。

著者のLindsay & Normanは、本書の序文でこう述べている。“新しい研究分野がいままさに開花した。人間の情報処理の研究は続々と、人間のメンタルプロセスの理解に重要な洞察を生み出し続けている。新しい現象は旧いアイディアに挑戦する。新しいアイディアは、旧い現象の理解を前進させる。毎年、新しい展開が我々の知識を深め、行動的展望を拡張してきた……。”脳と心の情報処理研究に対する2人の意気込みが伝わってくるようではないか。

この本の初版が出版された1972年は、ときあたかも“認知革命”のまっただ中であつた。H. Gardnerの名著『認知革命: 知の科学の誕生と展開』(1985)によれば、“1970年の中頃になって、初めて認知科学というコトバを聞いた。認知的なことに興味を持つ1人の心理学者として、当然のごとく、この新しい科学の方法や研究領域に引かれるようになった。このことについて体系的に書かれたものを見つけることもできず、また仲間にも聞いても依然として分からないままであつた……。”彼のコトバに示されているように、現在ではほとんど信じられないくらい認知科学や認知心理学をうまく案内してくれる優れたテキストがなかった時代だった。そのようなとき

に、タイミングよくこの『人間の情報処理』が出現したのだ。そして、本書の出版(初版)を機に、認知心理学の本が続々と出版されていった。

学生諸君がある科学分野を初めて学ぶときに、どんなテキストを手にしてその扉を開くかということは、その分野の第一印象とその後の興味の持続を決定する重要な要因の1つである。その点で、本書は現代心理学への入門書としていまだ最適なテキストの1つであると筆者は信じている。

本書の特徴は、次の3点である。

- (1) 情報処理と題するとはいえ、非常に広範囲に及ぶトピックを取り扱っている。それらは、「感覚システム」、「知覚システム」、「神経情報処理」、「パターン認知と注意」、「記憶システム」、「記憶の運用」、「知識表現」、「問題解決と意思決定」、「思考のメカニズム」、「社会的相互作用」、「ストレスと情動」である。
- (2) 徹底して学際的立場から、心の情報処理を捉えようとしている。上のトピック群は、心理学、生物学(神経生理や医学)、言語学、社会心理学にまたがっている。
- (3) 初学者の興味を心の情報処理研究分野に引きとめる面白さが随所に見られる。

最後に、著者の1人であるD. A. Normanによる日本語版への序文の一節を紹介しておこう。“科学技術の発展にともなって、人間をいっそう深く理解し、技術を利用している人間自身の要求と目的にかなった技術のあり方を考えていくことがますます重要になってきている。偶発事故を減らし、人間の生活をもっと便利に、快適なものにするために人間と機械との相互交渉を進展させていく上で、心理学は大きな役割を果たすべきであると思います”このコトバは、今でも生きている。

(平成17年2月16日受付)

中溝幸夫/九州大学大学院人間環境学研究院
nakamizo@lit.kyushu-u.ac.jp